五四前夜天津學生の意識

――南開學校『校風』を中心に――

片岡一忠

はじめに……三八七頁
一　南開學校……三八八頁
㈠　嚴修と張伯苓
㈡　課外活動
二　『校風』の發刊……三九四頁
㈠　刊行時期の中國
㈡　誌面の構成、その他
三　『校風』の論調……三九八頁
㈠　學生の責任論―救國
㈡　帝制反對―反袁
㈢　校長張伯苓の激勵―愛國
㈣　新文化運動の旗手たちの激勵―社會改良
㈤　再び學生の責任論―「合群」
おわりに……四一六頁

はじめに

天津における五四運動は、その當初より學生がこれを主導した(1)。南開學校、北洋大學、師範學校、法政學校、水產學校、官立中學、私立法政學校、高等工業學校、甲種商業學校、新學書院等に學ぶ男子學生、直隷第一女子師範學校、中西女子學校、貞淑女子學校、普育女子學校等の女子學生、それにそれらの學校の卒業生らは、運動の中で各自の思想をみがき、運動を高揚させていったのである。

では、運動勃發前――それは、內にあっては袁世凱を頂點とする軍閥政治の時代であり、外からは日本の侵略の意圖が明確化された時代であり、そしてそのはざまで閉塞していた知識人の前に、陳獨秀が雜誌『新青年』をもって新文化を提起した時代であったが――、天津の學生たちはどのような意識・思想狀況にあったのであろうか。本論は、馬駿・周恩來ら學生、時子周・馬千里らの教員を運動の指導者として輩出した南開學校の校內誌である『校風』の記事を分析することによって、右の問題の解明にせまらんとするものである。(2)

以下、まず南開學校の教育方針と學生の課外活動を紹介し、ついで『校風』の發刊、その論調の分析をおこなう。

一　南開學校

㈠　嚴修と張伯苓

南開學校(3)は、一八九八年（光緒二四）に嚴修がその子弟の教育のために張伯苓を招聘して開いた嚴氏の家塾（嚴館）にはじまる。嚴氏は浙江省慈谿縣出身で、天津に移り住み鹽業で成功した家柄である。嚴修(4)（字は範孫、一八六〇―一九二九）は一八八三年（光緒九）の進士（二甲第一〇名）で、翰林院編修を經て一八九四年から一八九七年の閒貴州學政となった。この學政在任中、康有爲の公車上書に刺激をうけて科擧制に經濟特科を設けて人材登用の途を開くことを請う上奏をおこない、變法支持の態度を表明した。戊戌政變の際、嚴は貴州學政の任を終えて天津に歸っていたが（一八九八年三月）、康有爲、梁啓超らとの接觸が少なく、在京期閒が短かったこともあって、難を免れた。嚴館を開いたのはこの年の一一月であった。義和團事件後のいわゆる「光緒新政」がおこると登用され、一九〇四年直隸學務處總辦、翌年には學部の新設にともない右侍郎に任ぜられた（のち左侍郎）。強い中國にするためには變法が必要であり、その變法をおこなう人材養成のためにまず新式教育を導入すべきであると考えた嚴修は、科擧制の廢止、近代教育制度の導入など、清末の教育改革を推進した。一九一〇年病氣を理

由に職を辭して天津にもどり、以後清朝政府さらに民國政府の要請にもかかわらずふたたび任官することなく、天津の教育文化事業に專念した。

いっぽう、張伯苓(5)（伯苓は字、名は壽春。一八七六—一九五一）は天津出身で、李鴻章が天津に開いた天津水師學堂（航海科）に一八九一年に入學し、一八九五年に卒業した。中國の誇った北洋艦隊は前年におこった日清戰爭で壞滅的な損害を被っていた。張はかろうじてのこった軍艦通濟號で見習い士官として勤務したが、一八九八年彼が船を離れるに至る事件がおこった。この年イギリスはロシア、ドイツ、フランスに倣って清朝政府に租借地を要求して威海衛の租借權を獲得した。山東半島の先端に近く渤海に臨む威海衛は日清戰爭以來、日本軍の占領するところとなっていたが、ここに至って一旦清朝政府に返還されることになり、清朝政府はその接收のために通濟號を派遣した。張は通濟號に乘り威海衛接收の一部始終をみたのである。すなわち、清朝（中國）の接收に際しまず日本國旗が降ろされて中國國旗が掲げられたが、翌日には威海衛の中國からイギリスへの引き渡しがおこなわれ、中國國旗が降ろされてかわってイギリス國旗が掲げられたのである。この光景は張伯苓（當時二三歲）に大きな衝擊とはげしい憤りをおぼえさせた。中國はかくまでも弱體化しているのか、強化しなければ中國の存續ははかれない。自強の途は新しい人材を養成することであると悟り、「教育救國」の事業に身を捧げることを決心した。かくして嚴修に招かれた張伯苓は嚴館において嚴家の子弟五人を相手に教育實踐を開始したのである。

嚴館は當時の新式教育の要請と嚴修の聲望、そして張伯苓の熱意に支えられて發展した。一九〇四年には、張が別に教授していた王館（天津の鹽商王奎章の家塾）を合併して、天津で最初の中學堂「私立敬業中學堂」となり（翌年には私立第一中學堂と改稱）、さらに一九〇七年には學生の增加にともない手狹になったため、鄭炳勳（字は菊如、天津邑紳）より寄附された天津舊城西南郊外の「南開窪」と呼ばれる土地に、嚴修（當時學部左侍郎）、王奎章、徐世昌（字は菊人、天津出身、進士、當時民政部尙書）、盧靖(6)（字は木齋、當時直隸提學使）、嚴義彬（字は子均、邑紳）、さらに袁世凱（字は慰亭、當時直隸總督）ら、天津の大官・邑紳の援助を得て新校舍を建てて移轉し（同年一一月）、それを機會に校名を「南開學校」と改稱した。清

末の混亂期の財政困難は嚴修の支援と、盧靖の後任の提學使傅增湘（在任一九〇八—一九一一）の指示で天津客籍學堂、長蘆學堂を吸收したことで兩學堂に配分されていた官費がそのまま南開學校に支給されたことなどで切り拔け、一九一五年九月當時は教員五四人、學生八五一人の天津で指折りの中學校に成長していた。(7)

南開學校は嚴修が創立し、在津高官・邑紳の援助に支えられたとはいえ、張伯苓がつくり育てた學校である。張は淸末中國國勢衰頽の因は中華民族の五つの大病——愚、弱、貧、散、私、にあると考えた。

「愚」とは、千餘年の閒に中國人の心中深く八股文の餘毒がはいりこみ、保守的となり、進步を求めなくなった。また教育は普及せず、人民の多くは無知蒙昧で、科學知識に缺け、迷信的であることを指す。「弱」とは、文を重んじて武を輕んじ、勞働を卑しみ、アヘンの害毒が流行し、早婚の弊害が除去されないことで、それがために民族の體力は衰弱し、民族の志氣は消沈しているという。「貧」とは、科學が興らず、災害が頻發して生產力は弱く、ために生計は困難となった。加えて政治が腐敗し貪汚なることが流行して人民の生活は破產の淵に瀕していることをいう。「散」とは、二千年來中國人は專制體制の下に蟄居し、組織することも團結することもできなかった。このために個人主義がいびつな形で發展し、團體觀念はきわめて薄弱たるものとなった。中華民族全體は一つの盤の中の砂のようなもので、「聚まれば力強く、散すれば力弱し」、「分れれば則ち折れ易く、合せれば則ち摧き難し」の理を悟らないことをいう。最後の「私」、これこそが中華民族の最大の病根であると、張伯苓はいう。國民は利己心が強く、公德心が弱い。みること爲すことが短小淺近で、目の前のことですぐに將來を推しはかってしまう。個人の存在は知っているが、團體を知らない。その流弊の及ぶところは民族思想の缺如、國家概念の薄弱に到っている。實に慨くべきことである。

張伯苓はこの民族の五病を矯正し、さらにすすんで國恥を雪ぎ自強を圖るための「救國建國の人材」を育成する目的（教育救國）で南開學校を創辦したのである。張の教育方針は「三育」（德育、知育、體育）と呼ばれ、時弊に染らず新しい道德行爲を身につけ、科學的知識と新思想を習得し、體育鍛錬にはげむことで健強な身體をつくり、さらに團體活動に參加して組織

能力を身につけ、もって將來の愛國事業に取り組める人材を育成するとした。[8]

南開學校は當時としては相當に規律の嚴格な學校のひとつであった。日々の身だしなみ、宿舎の整理、清潔の勵行にはじまり、賭博・女郎あそび・早婚（二一歳未滿）は嚴禁（違反者は退學處分）、飲酒、喫煙も禁止され違反者は姓名を記錄されたという（惡質著は退學處分になったとおもわれる）。張伯苓はほぼ每週水曜日の午後、學生全員を講堂に集め、「修身班」と稱して、古今內外の故事、話題を取りあげながら仁義、道德、愛國精神を說く講話をおこなった。學生への敎育方針の徹底を圖らんとしたものである。二、三の例を擧げれば、次のとおりである。[9]

○「敎育の一事はただ學生に讀書し習字させるだけではありません。完全な人格を形成することが重要であり、三育を幷進させて偏廢させるべきではありません。」（一九一四年四月二九日）

○「本校の敎育宗旨は學生に將來、『通力合作』し、相互扶助することができ、活發勤奮して『自治治人』できる人材を育成することです。英語でいう、Co-operative human being です。」（一九一六年一月一九日）

○「冬休みが間近になり、諸君の多くは歸省するでしょう。歸れば社會の惡習に染まるでしょう。近頃世の中の風潮はとどまるところを知らず、邪行が尙ばれ、賭博に至ってはもっともあがめられ、流行しています。それ故に諸君の出發に際し私はひとこと戒めのことばを申さねばなりません。……」（一九一六年二月二三日）

敎育課程は四年制で、國文、英文、數學は四年間必修とされ、中國歷史地理、世界歷史地理、化學、物理、生物等の科目が設けられた。理科の實驗設備は日本をはじめ海外からの輸入器械が多く、學外から多くの見學者が訪ずれるほど立派なものであった。[10]さらにそれらの器械は授業中敎師が實演するだけでなく、學生一人一人が實際に手にとって實驗できるほどにととのえられていたという。それもあって南開學校の名は中國全域に知られ、各省から有能な學生を集めたが、[11]授業料が年間で三六元、[12]寮費[13]は年間二四元、さらに食費として每月四、五元を必要としたとすれば、[14]誰彼となく自由に入れる學校ではなかったことも確かである。

體育は教育方針「三育」のひとつに擧げられており、「學問のできる者は健全な身體をもつべきである。道德の高い者は健全な身體をもつべきである」(15)と、張伯苓がいうとおり、嚴館時代から重視され、正課のひとつであった。はじめは操身と呼ばれ、張が學んだ天津水師學堂のそれに倣い、柔軟體操や角力、マット運動、啞鈴や棍捧を用いての體操が中心であった。陸上競技やバスケットボール、サッカー、テニス等の球技は課外活動でおこなわれた。

(二) 課外活動

南開學校には正課の外に、課外活動があった。(16) 張伯苓が、私利私欲に走り、團結・共同しない當時のわるい風潮を改め、協力し、自己の見解をもち他人の意見をきく精神を養うためには團體活動が重要であるとして奬勵し、いろいろと便宜をはかったこともあって、課外活動は南開學校の大きな特色のひとつとなった。

課外活動はスポーツ活動と文化活動、それに奉仕活動に分けられる。まずスポーツ活動は體育の專任教員が一人であったことから、一般の教員や卒業生がコーチ役を買ってでて自主的におこなわれた。運動器具は充實し、グラウンドもよく整備されていて、毎日放課後のグラウンドは體操服姿の學生で埋まり、毎週どこかのクラス（班）對抗の競技會が開かれたという。さらに選抜チームによる天津の新學書院、北京の淸華大學のチームとの對抗試合もおこなわれ、そのなかから一九一七年東京で開かれた第三回極東運動會への中國代表團（團長張伯苓）に七名の代表選手を送りこんだのである。

文化活動では、敬業樂群會、自治勵學會、靑年會、國文學會、英文學會、軍樂會、音樂會、唱歌會、演說會、新劇團等の團體が組織され、社會奉仕活動團體としては義塾服務團を擧げることができる。これら諸團體は大部分が學生・敎員合同の組織であった。

敬業樂群會は遊戲、演劇、演說等を通して「同學の感情を聯絡する」ことを宗旨とした學生の娯樂的親睦團體で、一九一四年五月一四日に正式に成立した。

自治勵學會は私立第一中學堂時代からの學生の學術研究團體である。文學、科學、經濟、美術、演説等の部をもち、敬業樂群會にくらべて知識習得を前面に出したものであった。

青年會は「キリスト教の要道を研究し、德・知・體の三育を發達させる」ことを宗旨とすと明確にうたっているとおり、YMCAの南開學校支部といえる團體で、キリスト教の奉仕精神から衛生演説會、社會衛生團、通俗教育團等を組織して社會奉仕活動にも參加した。校長の張伯苓が一九〇九年に洗禮を受けてキリスト教徒になり、また教員にもキリスト教徒が幾人かいたこともあって、一九一一年頃からキリスト教徒學生の小グループができ、一九一四年に正式に青年會となった。

演説會は學生の話術の訓練と思想（自己主張）發表能力の養成を目的に組織された。定期的に公開演説會を催した。學校は優秀な發表者を表彰して奬勵した。

新劇團の活動は、(17)一九〇九年張伯苓の提唱で彼の作品を彼自身の演出で教員・學生が演じたことに始まる。初期は演説の練習が目的で、その都度團員を募集して公演をしていた。民國以降は毎年一〇月一〇日の國慶節に新作を發表した。それが敬業樂群會が活動の一環として演劇を掲げたことから、一九一四年一一月同會員を中心に教員・學生合同の新劇團が正式に成立し、(18)教員の時子周が團長に選ばれた。馬千里（教員、演作部長）、周恩來（布景部副部長）、馬駿、陳鋼（編纂部副部長）等、『校風』でも健筆をふるい、のちには五四運動で活躍する人物が女裝もして熱演した。公演は校内だけでなく、天津・北京市内さらに河北一帶でおこなわれ、好評を博した。作品は團員の自作自演で、『恩怨緣』（一九一四年）、『一元錢』（一九一五年）、『一念差』（一九一六年）、『新村正』（一九一八年）が有名であった。ともに舊思想、舊道德、舊制度を批判した内容であったといわれる。一般民衆への演劇の影響力は五四運動の中で如何なく發揮された。

國文學會、英文學會、軍樂會、音樂會、唱歌團については説明を要しない。最後に、義塾服務團は教員と學生の合同出資で天津市内に義塾を設け（第一義塾―一九一五年四月設立。第二義塾―一九一六年三月設立）、生活困窮の未就學者にいわゆる「讀み、書き、そろばん」の識字教育をほどこした。日常業務は各班（クラス）二名の幹事があたった。平民教育運動の性格

をも有するものである。

課外活動の分野でのもう一つに出版活動があった。右に紹介した諸團體からもいくつかの出版物がだされたが、いま五四以前に限って列擧すれば次表のとおりである。(19)

誌名	發行團體名	號數（發行年月日）	備考
星期報（週刊）		一〜四九期（一九一四年三月四日〜一五年六月一四日）	
敬業（半年刊）	敬業樂群會	一〜六期（一九一四年一〇月〜〔一七年六月〕）	
校風（週刊）	校風報社	一〜一二七期（一九一五年八月三〇日〜一九年五月二六日）	一時停刊、一一月七日復刊
勵學（半年刊）	自治勵學會	一〜二期（一九一六年二月〜？）	
青年報	青年會	一期（一九一六年一〇月）	
英文季報 (The Nankai Quartarly)	英文學會	一〜三期（一九一五年〜一六年）	
The Nankai		一期（一九一六年一二月）	
南開思潮（不定期）		一〜五期（一九一七年一一月〜二〇年一一月）	『敬業』『勵學』『青年報』の三紙を合併

これらの中で『校風』誌が發行期間、號數ともに他誌を斷然壓倒している。『校風』誌は南開學校學生の課外活動の一部であるとともに學校誌的性格をもつ雜誌である。次にその『校風』の發刊の時代的特徵と誌面の構成等についてみてみよう。

二 『校風』の發刊

(一) 刊行時期の中國

『校風』は一九一五年八月三〇日、同じく南開學校の校內誌の『星期報』の後を繼ぐ形で創刊されたB五判の週刊雜誌で、

五四運動發生直後の一九一九年五月二六日に停刊（一時的）するまで、一二七期を刊行した。

この『校風』刊行時期は、『校風』に半月遅れて創刊された『青年雜誌』（のち『新青年』と改稱）に代表される、新文化運動の時代とかさなるが、國民にとっては政治的には暗黑の時代であった。すなわち、一九一二年に成立した中華民國の共和政體は袁世凱政權によって形骸化されていた。一九一五年には、その前年よりはじまった第一次世界大戰のため歐米諸國が中國を顧みる餘裕を失っていた時期をねらった日本のいわゆる對華二十一ヵ條要求が中國につきつけられていた。これに對して中國國民各層は一致して要求拒絕を求め、反日運動を展開した。運動は五月九日に袁世凱政府が日本の要求を「受諾する」と、最高潮に達したが、七月にはほぼ終息してしまった。日本の中國侵畧の意圖が明確になった譯であるが、同じころ國內では、はじめはひそかに（間接的に）、そしてのちには公然と（直接的に）、共和制廢止、帝制復活が袁世凱によって畫策されていた。八月には大總統顧問のグッドノウが、袁世凱の御用新聞『亞細亞日報』に「共和と君主の論」と題する論文を發表し、そのなかで中國のような民智の低い國においては共和制をたてるのは困難であり、中國の立憲は君主制にもとづいておこなうべきであるという見解を出して帝制導入の必要性を強調すると、十數日のうちに袁世凱の帝制運動を推進するための言論機關である籌安會が組織された（八月二三日成立）。買收・脅迫、さもなくば彈壓等の手段で新聞をはじめ多くの報道機關を世論づくりに利用し、遂には國體決定投票という「民主的」な形式を經て、その年の一二月袁世凱は皇帝位登極を受諾した。この帝制に對する反對運動の據點の一つが天津であった。かつては袁政權に協力した梁啓超や彼の弟子の蔡鍔らは、天津（租界地區）で反袁行動を密謀した。帝制運動を非難した梁の文章「異なる哉、所謂國體問題なるもの」は天津で執筆された。帝制反對運動は天津での密謀から雲南を中心とした「護國戰爭」＝第三革命へと發展し、袁世凱政權內部の足並みの不ぞろいもあって、翌一九一六年三月には帝制取消を勝ち取り、六月袁の死をもって終息した。

袁世凱は憤死したが、その後北京の主の座を爭ったのは、段祺瑞（安徽派）・馮國璋（直隷派）らの袁のかつての部下たちであった。一九一七年七月には張勳による淸朝復活をねらった復辟クーデターがおこった。復辟は失敗に終ったが、「民國」

はふたたび動揺をおこした。これより前、段祺瑞はドイツに宣戰し、參戰軍を編成することを名目にして、日本の援助（西原借款）をうけたが、自己の軍隊の擴大につとめ、實際にヨーロッパ戰線まで軍隊を派遣することはおこなわれず、國內の抗爭を激化させるばかりであった。一九一八年、大戰は終結した。一兵卒の派遣をもしなかった中國ではあったが、各地で盛大な戰勝祝賀大會が開かれ、一九一九年一月からパリではじまった對ドイツ講和會議には連合國の一員として代表團を送り、中國におけるドイツ權益の返還に大きな期待をかけたのであった。

このような政治社會狀況の下で、新鮮な表現と强烈な思想をもって登場した『新青年』は多くの學生・青年の心をとらえたといわれるが、それとは別個に、この時期中國各地では、學生らの手によって同人誌、校內誌のちがいはあるが、數多くの雜誌が發行されていた。[20] 學生たちは閉塞した狀態の中から、そこに何か自己の感情の發露を求めたのである。『校風』もそのような雜誌の一つであった。もちろん『校風』は南開學校という天津の一中學校の校內誌にすぎず、『新青年』とくらべると思想、表現ともに幼稚であるかもしれない。また特定の學生が指導し、一貫した主義・主張があったわけでもない。學外への影響も大きくなかったであろう。しかし、學生は學校という枠の中から中國をみ、世界を聞いて、思考したのである。その限りで、『校風』は當時の學生の様々な意識・思想を反映した出版物であったといえよう。

(二) 誌面の構成、その他

『校風』は敬業樂群會の『敬業』や自治勵學會の『勵學』等の學生同好會雜誌とは異なり、南開學校學生全體の雜誌であった。編集の主體、校風報社は各學年各班から選出された代表＝社員（各班二名）と教員代表一名から構成された。組織は大きく編輯部と經理部に分けられ、編輯部には總編輯、副編輯の下に後述する部門別の責任者（總主任、主任各一名）、數人の職員を置いた。經理部には總經理、副經理各一名と數人の經理員を置き、さらに教員一名が特別經理員として加わった。社員は半年（總編輯、副編輯らの劇務ポスト）、ないし一年（主任以下の職員）で改選された。

誌面の構成をみると、言論（社論、代論）、紀事（校聞）、警鐘、演說、文苑、課藝選錄、小說、劄記、雜爼、各會報告等の欄が設けられ、それぞれの擔當者が編輯した。ほぼ毎期の巻頭を飾る「社論」は總編輯か副編輯、ときに社員によって執筆された。『校風』の主張——當時の學生の意識——を傳えるものとして重要な文章である。社論に代って掲載される「代論」は一般學生の應募論文、または作文大會での優秀作品である。これまた重要な文章である。時には來賓の演說錄が載る。「紀事」欄には學校行事、各會の活動、人事異動（教員、學生）等に關する記事が竝び、南開學校日誌ともいえる。「警鐘」は社員の執筆、一般學生、教員の投稿論文のちがいはあるが、ともに小社論とでもいえる時事問題を扱った短文を收める。「演說」は校內でおこなわれた教員、學生、來賓の演說錄で、校長張伯苓の修身班での講話もこの欄に掲載された。「文苑」には旅行記、詩評、さらには隨想錄といった比較的文學的色彩の濃い長文の作品が收められている。但し旅行記の中には社會調査といったものが時にみられる。「課藝選錄」に收錄されるものには國文科での提出論文中の優秀作品（教員のコメントが付けられている）が多かった。

以上のような豐富な內容をもつ『校風』は毎期一六頁から三〇頁前後で、毎週月曜日（のち水曜日）に發刊された。發行は學年曆に沿い、入學式のおこなわれる八月下旬または九月上旬から——年末年始の二、三週間を除く——翌年六月の卒業式ごろまでで、七月から八月中旬までの年度末期は休刊となり、一年間に約三五期發行された。

誌代は校內者と校外者の二本立てで、校內者は半年分銅元三三枚（のち四二枚に値上げ）、校外者は郵便切手で三三分半（のちに郵便切手で四〇分、または銅元で四九枚となる）であった。南開學校學生は『校風』の購讀が義務づけられており、投稿、社員となる權利を有していた。一九一六年九月時點の購讀者數は、教員—五二、學生—八〇五、外寄（郵送）—七四、送閱（寄贈）—八五の合計一、〇一六名であった。[21]

以下に節を改めて、第一期から第一二七期までの『校風』所載論文・記事[22]を言論欄掲載論文を中心に検討することによって、五四前夜の天津南開學校學生の意識とその變化を明らかにしていきたい。[23]

三　『校風』の論調

(一)　學生の責任論―救國

吾輩は二十世紀の競爭の時代に生まれ、積弱不振の中國に生まれ、又た外侮日に逼り自ら顧みるに暇なき危急の時に生まれり。吾輩は是の時に生まれり。是の國に生まれり。安くんぞ坐視して一に〔中國を〕救わざるに忍びんや。……天下の興亡、匹夫も責有り。吾れ國民たれば則ち國の興亡と關係有るに至る。然らば則ち吾人の責は既に重く且つ大なり。吾れ此に至りて始めて敢決して曰く、「吾人の目的は將來能く此の重大の責任を負うを期するのみ」と。……吾輩學生の責は實に他人より重きこと數倍なり。

『校風』第一期の卷頭を飾った、主筆陳鋼[24]（字は鐵卿[25]）による「發刊詞」の一節である。一五歳から二〇歳前後の中學生[26]は、當時の中國社會にあっては立派な知識分子の一員であった[27]。かつての士大夫の國事に關わる意識にも似た氣概でもって、陳鋼は一九一五年の中國の內外情勢を直視して、學生にまず國民として、學生としての責任を全うすることを訴えたのである[28]。陳鋼はさらに「愛國を說く」と題した論文（第二期）の中で、

今、我が國の人々も亦た皆な愛國を曰えば、則ち我が國固より宜しく強く且つ盛んにして、歐米を凌駕し、世人の共に仰ぐ所と爲るべし。然るに其の結果、何ぞ其れ相反するや。……

夫れ愛國とは空言の以て濟す有るべきにあらず、激烈の以て成る有るべきにあらず、且夕の以て效す有るべきにあらざるなり。吾れ、夫の國を愛する者を見るに、東走西奔して結黨立社し、口に愛國の言を絕やさず、未だ嘗て人を動かし一時を炫燿すべからずんばあらず。然れども其の行事を考うれば、則ち純然として其の言語と相反し、愛國の二字に假りて以て口頭禪と爲し、陰に以て其の私欲を濟す。

とのべて、「愛國」的政治家の投機的行動を非難し、このような愛は「愛にあらずして、實に害である」と斷言した。そして國家と國民の關係について、陳鋼はその考えを次のようにのべている。

夫れ、一國の成は無數の人民を積みて以て成る者なり。國は自ずと強かること能わず、人民強くして國強し。今、其の國を強うせんと欲すればまさに先ず同胞を強うすべし。……同胞を愛し、實事求是し、虛聲を以て相矜らず、己の力の應に行うべきの事を盡くせ。一人之れを唱えて、百人之れに和し、十百人之れを唱えて千人之れに和す。虛聲を競わず祇だ實際を求めんのみ。一國の人、各々其の責を盡くせば、遍國の中皆な強健の分子と成れり。此に至れば國の不強を欲するも豈に得べけんや。則ち愛國の二字は盡責の謂なり。故に吾れは謂う、能く其の責を盡くす者乃ち眞の國を愛する者なりと。

國は一人一人の人民の集合體である。各人がその國民としての責務を盡くせば、國家が滅亡することはない。國民は主權者なのである。陳鋼は明確に國民たる意識概念を提示したのである。[29] さらに「服役心と鑒別力」（第六期）では、國民と政府の關係について次のようにいう。

人は服從の心無かるべからず。尤も強き服役の心無かるべからず。惟だ其の始めに於いて其の見解の當否を察すべし。苟しくも見解之れ不當にして、服役の心を誤用し、生死を顧みざれば、終には惡果を得ん。

人固より鑒別の力無かるべからず。其の是非を察し、其の邪正を辨じ、胸中に明瞭なれば、取捨自ずと分たる。然る後其の宗旨を定め、堅強の心を以て服役之れを行う。之を以て事を謀れば、事に成らざる無し。之れを以て國を救えば、國賴りて以て興れり。

そして「責任を盡くす」ためには「服役の心」も必要ではあるが、盲從的であってはいけない。まず「鑒別の力」（判斷力）を身につけるべきである。そのためには學生は「讀書を多くし閱歷を增すことを以て當務の急と爲すべし」、と結んだ。

では、いかなる書物を讀むべきか。陳鋼は國學研究を提唱したのである。彼はすでに「國學に對する感言」（第四期）で、次のように記している。

西學、固より宜しく研究すべし。而して國學は我が國の國粹爲れば、亦た未だ偏廢すべからざるなり。然れども學校は西學を以て重しと爲し、而して學生も亦た中文を以て輕しと爲せり。故に英文を教授せらるる時に於いては則ち注意して之れを聽き、惟だに一字の或いは遺せんことを恐る。國文を教授せらるるに及びては則ち畧(ほぼ)注意せず。倦れて睡れる者之れ有り。他書を旁閲せる者之れ有り。心に鴻鵠を思う者も亦た之れ有るなり。……今、列強の屬國を對待するの法は首(ま)ず其の人民の本國の文字を習うを禁ず。蓋し本國の文字旣に絶ゆれば、則ち人民、復た國家の觀念を有すること無ければなり。……

吾れ願わくば、自今以後多く國學を研究し古人の學問を闡發し以て挽救の策と爲さんことを。

そして、敢えて大聲でいうとことわって、「國學は我が國の精華である」とも斷言した。文苑部主任の童啓顔（一九一五年、二一歳）[30]も「國學の關係を申論す」と題する長文の論文を發表して（第五、七、一〇、一一期の四回に分けて掲載）、國學を「國家の靈魂」と讃え、「此の靈魂が一たび失なわるれば、國家は消亡し種族は顚瘁す。靈魂がもし存すれば、國家弱きに至るといえども人民は到りて柔に、終には後興（ママ）の一日有らん」（第五期）として、國學の保持を強調した。

民國の成立と王朝體制の崩壞によって、新しい共和政體、國民思想の時代の到來が期待されたが、その期待は袁世凱政權の出現によってもろくも崩れ、しかもその袁政權を通じて外國列強は中國侵畧（利權獲得）を畫策していたのである。陳鋼ら學生はこの外國列強の侵畧に對する抵抗の核、救國の基礎として、國學を提示したのであった。士大夫的存在である學生たちは國學を外からの政治的文化的侵畧に對抗しうる、唯一の中國傳統思想として意識したのである。さらにいえば、國學は復古的であるが故に、外への抵抗の核として逆に普遍性をめざす原理となりえるものであったのである。

(二)　帝制反對—反袁

國學は、外國列強の中國侵畧に對抗する思想として創出されたものである。では當時最大の國內問題であった袁世凱の帝制

運動について、南開學校の學生はどのような態度をとったであろうか。

『校風』の誌面をみるかぎり、袁世凱の帝制問題に直接言及した記事はない。一九一五年九月一六日の袁世凱の誕生日、さらに一〇月六日(ママ)（實際は五日）の孔子誕生日はともに休校となっている。(31) 童啓顔は新入生に對する歡迎のことばの中で次のようにのべたが、當時の抑壓された狀況を考慮すれば、相當に思い切った發言であったといえる。

亡國の學派は奴隷の性根なり。其の毒の深きこと其の習いの固きこと、直ちに今日に至り、餘焰尚お存す。故に數十年來人爭えば我讓り、人進めば我退き、人令を出して我命を受く。人刀俎して我魚肉となりて、直ちに今日の國勢維艱、四郊多壘、群盜入室して臥榻寧からざるに至れり。……厥の由る所を揆れば、皆な此れ腐朽の學派、不強の分子の以て之れを致すこと有るなり。彼等固より自ら聖人の徒、大道の統爲るを詡るも、孔子豈に嘗て此の學說を主せしや。彼又た何ぞ曰う、「志士、仁を成せり」(32)、「戰陳(ママ)にて勇なきは孝にあらざるなり」(33)と。蓋し彼昏く、吾が國粹の興國する能わざる にあらざるを知らざるなり。……（第三期、言論「新同學に贈る」）

袁世凱を名指しで攻擊したものでも、孔子・孟子を否定したものでもないにしろ、孔孟の徒を騙る一派を亡國腐朽の學派とよんで、その欺瞞性を非難したのである。

さらに帝制運動が最終局面に入った一二月六日發行の『校風』第一五期の言論「古に泥む者は孔孟の說に假りて以て行うべからず」（副主筆孔繁霱）は、これまた「時政を妄議せず」と閒接的な表現ながら袁世凱批判をより鮮明に打ちだした。

況んや今の所謂國粹を保存せんとする者、其の宗旨を吾れは敢えて知らざるも、其の結果は則ち古に泥むのみ。古に泥むは新莽の輒敗せし所以なり。顧だ吾が學術・閱歷は倶に淺く、絕えて敢えて時政を妄議せず。……古に泥む者は動もすれば孔孟を言うも、孔孟の絕えて古に泥む者にあらざるを知るを要す。古に泥む者は孔孟の徒にあらざるなり。

袁世凱のいう孔教は眞の國粹＝國學ではない、彼らは孔孟の徒ではない、というのである。しかしながら、そこには國學＝國粹に據って、同じく國學＝孔教を利用する帝制運動に反對するという、きわめて齒切れのわるい對應がみられた。

一二月一二日、袁世凱は登極を受諾した。「中華民國」は「中華帝國」となり、翌一九一六年は中華民國五年ではなく、洪憲元年と改元された。

この變化に南開學校學生は「從順」ではなかった。多くの新聞がつぎつぎと袁世凱新皇帝を讃える記事を掲載し、その發行年に「洪憲」の元號を用いる中で、『校風』はそれまでの「中華民國」にかえて西暦年を用いたのである。そしてその第二一期（發行日は"March 13, 1916"）に孔繁霱は「隱士と英雄」という、從來のものとは趣きを異にする題目の論文を發表した。すなわち、「隱士」という術語は老莊思想の用語であって、少なくとも國學のことばではない。また「英雄」の出現も孔子の望むところではないからである。

嗚呼、風は大地を淒うし、血は九州を潰す。世人、英雄を思うも、我は則ち尤も隱士を思う。……夫れ、治世は道を以てし、未だ術を以てして能く久しうするを聞かざるなり。英雄は術を以てし、而るに君子は道を以てす。……世愈いよ亂るれば、則ち英雄愈いよ多く、君子愈いよ少なし。而して天下は道を以て虚妄と爲し、術を以て常經と爲せり。術の言を爲すは詐なり。詐れば則ち人の爲にするを知らずして、但だ己の爲にするを知るのみ。國を擧げて己の爲にすれば、則ち上下交ごも征り、而して國託する所なくして、亂れ、困り、亡ぶ。

それ故に、「英雄の輩出は國家の幸福にあらず」と評し、そして「英雄竝起の日は卽ち神州陸沈の時なり」と結んだ。「英雄」＝袁世凱に對する痛烈な批判である。ところで、南開學校の禮堂の入口には「慰亭堂」と刻された一枚の扁額が掲げられていた。慰亭とは袁世凱の字である。一九〇七年に袁の捐助を得て禮堂を建築したことを記念したもので、南開學校との關係を象徴するものであった。しかし袁が皇帝を稱すると、學生たちはその扁額を取りはずすことを學校當局に要求し、撤去させたのであった。[34] また「隱士と英雄」を掲載した同じ第二一期の譯叢欄には「世界最小の共和國」と題する、ヨーロッパの小國サンマリノ國の紹介文がみえる。あたかも世界最小の共和國の安定と繁榮を引き合いに出して、世界最大の共和國であつた中國の混亂と破滅を悲しんだかのようである。

これまでみてきた『校風』掲載記事は、陳鋼（主筆）、孔繁霱（副主筆）、童啓顔（文苑部主任）の執筆によるものが多い。因みに言論欄執筆者についてみると、袁世凱の帝制取消（一九一六年三月二二日）までの二二期中一九篇が前記三人の執筆であった（六月末陳鋼らの卒業〔すなわち校風報社職員改選〕までの三五期分についても二五篇を執筆）。注(26)でも記したとおり、陳鋼ら年長學生は袁世凱の帝制運動、中國の現狀に對して強い危機意識をもっていた。そのおもいを『校風』誌上でのべたが、陳獨秀ら『新青年』の執筆者のように古今東西の思想文化に精通していた譯ではなく、勢い國學＝國粹に依據することで間接的な表現ながら時局に發言したのであった。それは外部に對してではなく、中華民國の成立による「光明」をみるには幼さすぎ、自覚した時にはすでに袁世凱の專制という「暗黑」の下にいた多くの後輩の學生に對して語られたのである。そして今、學生たちは國學からの自立、國學にかわる新しい據りどころを模索しはじめたのであった。

帝制取消後の五月、校風報社は「誠能動物論」というテーマで論文を募集し、その優秀作品として周恩來、馬粹の論文が『校風』に掲載された（第三〇、三一期）。周論文は孔子、キリスト、釋迦といった東西の聖人のことばを援用し、また馬論文は堯、舜らの中國の聖人の名を擧げるようなものであったが、兩者ともにリンカーンの演説の有名な一節を引用した。

> すべての人々をしばらくの間愚弄するとか、少數の人々を常にいつまでも愚弄することはできます。しかしすべての人々をいつまでも愚弄することはできません。(35)

この一節は同じ第三〇、三一期に連載された張伯苓の修身班での講話にもみえる。この引用の意圖する所は讀者に明白であったにちがいない。

六月六日、袁世凱は死去し、翌日、副總統の黎元洪が大總統に就任した。この新舊大總統の慶弔について、『校風』（第三四期）は紀事欄に「懸旗慶賀」の小見出しで次のように報じている（周恩來執筆）。

> 先週の水曜日（七日）は大總統黎公元洪の受任の翌日(ママ)爲り。各校校長、巡按使署に齊集し慶賀せり。校長張先生も亦た焉(これ)に與(あず)かれり。校中は是の日特に旗を懸げ綵を結び、以て慶幸を表せり。而るに時を同じうして復た半旗に下せり。蓋し前

の總統袁公世凱の逝世を追悼すればなり。

六月二八日、この日北京では袁世凱の葬儀がおこなわれていたが、天津の南開學校では第八回卒業式が擧行された。その席上、張伯苓は袁世凱を評して、「袁前總統は物事をおこなうに魄力に富み、機敏であるために外國人は口々にほめそやしました。然るに一敗地に塗れました。その最後において、たとえ相親相善の僚友であっても相信じることができなかったのは不誠のためであります。一世の雄の袁氏を以てしてもその最後を善くすることができなかったのです。況んや袁氏のようでないものにおいてをやです」。一方、「現總統の黎氏は才畧は袁氏に及びません。しかしながら即位して十日、全國は統一の勢いにあります。これは誠に恃んだためです。一は誠を以て成功し、一は不誠を以て失敗したのです。」、とのべた後、前出のリンカーンの演説の一節を援用して、

権術は一時的に一世を欺くことができますが、世界を萬世に至るまで欺くことはできません。不誠なる者がよく永らえ、失敗しないでいることは決してありません。

といい、何事をおこなうにも「誠」の字を基準とすることを求め、卒業生へのはなむけのことばとしたのである。(36)

(三)　校長張伯苓の激勵―愛國

<放暇彙誌>　國慶紀念日は適々日曜日に値り、特に前日の土曜日に一日を放暇せり。(第七期)

<慶賀盛事>　先週の火曜日は吾國の革命告成してより第五年の國慶紀念日爲り。方今、陰翳全て消え、洪光重ねて現われり。故に此の雙十の佳節に値り、國民の歡欣・歌頌の盛況、往年に益倍す。本日、行政公署由り各校に通函あり、齊裝整隊し公署に前往して慶賀すべしと。本校同學數百人も亦た是の日早八鐘に操衣を著し全裝して操場に在りて齊集し、辛樹人・王香庭の諸先生由り引導前往せり。樂聲悠揚、旗幟招展、一路隊列を嚴明にし、精神を勁壯して直ちに公署に至れり。國旗の前に在りて鞠躬して敬うに到り、三たび萬歲を呼べり。後に公署由り紅花を分給せられ以て紀念と作せり。歸

途は喜氣盈洋、頗る一時の盛況を極めり。（第四二期）

前者は一九一五年、後者は一九一六年の、ともに國慶節に關する『校風』の紀事である。兩者のちがいはまさに一目瞭然。前者の記事の事務的表現にくらべると、後者の記事の詳細さは袁世凱の死去によって專制の暗雲がふきとばされたと人々が感じ、「民國」を謳歌している様子を十分にうかがわせるものであった。

さて、『校風』の論調をみると、それまでさかんに唱えられていた國學、國粹の語がここに至って『校風』誌上から姿を消した。これにかわって校長張伯苓が修身班の講話を通して、「愛國」の語を前面に出して學生に〝新しい〟創造を求めてきた。(37)

> 中國人は愛國心に乏しい。……國とは人民の組織して成ったものであります。……現在は共和の時代です。中國人の愛國心は僅か五分間だけのものだと日本人はいっています。……西洋各國は文豪の鼓吹、教育家の提唱によって各方面で人民の愛國觀念が造成されています。中國はというと、國家が人民に愛國心を提唱していますが、どうしてでしょう。……昔の人は國民を喚醒せんと欲しましたが、今は則ち眞の國民(38)を新造し、新國を造るべきであります。その事は誠に難しいことですが、この難の字を習慣とすべきであります。西洋の諺に「神は自ら助くる者を助く」というでしょう。……我々は國家のため、人道のためを掲げて、將來の大同に備えるべきであります。この意識をもって前進すれば、愛國の心はまさにいまより倍加するでありましょう。（九月一三日―第三八期）

> 中國を強くせんと欲すれば、保守を打破し、改めて進取を持たなければなりません。……中國を強くせんと欲すれば、新しい中國を建てなければなりません。（九月二〇日―第三九期）

さらに、一一月一日の修身班では、開口一番「今日の題目はすなわち愛國の二字です」と發して、八年前（一九〇八年）の歐米教育事情視察旅行の際、アメリカの小學校での見聞として、校長が毎朝學生を率いて國旗にむかって敬禮をし、學生の愛國の念を養っていたことを引き合いにだして、本校でも今日から水曜日にはまず國旗にむかって三鞠躬禮をすると宣言した（第四四期）。

ここにいう一連の「愛國」の對象とされる國とは、以前（『校風』初期—一九一五年）陳鋼らが主張した、西學の外國に對抗するための國學の中國といったもの（救國）ではなく、人民の國＝「民國」を表現したものである。愛國心とは中國を愛する、民國をまもる氣概という、内にむけられたものであった。

では、愛國、新中國の建設はだれが擔うのか。「新少年」、君たち學生だ。——と、張伯苓はいう。(39) さらに張は校風報社社員を前にいう。

中國近來の巨患は有形の物質問題に在るのではありません。無形の精神問題に在るのです。精神が聚まれば、亡びても眞に亡びることはありません。精神が渙れば、亡びずとも必ずや亡ぶことになります。我が國の人心は頽靡して久しいのです。（第三九期）

されば、人心を揺りうごかす必要がある。その「利器」は二つある。一つは「演説」であり、いま一つは「報紙」であるとし、私は諸君に望むところは他でもありません。この練習に藉りて將來に備え、苦口婆心、正言勸世して以て國民の新精神を振い起こし、以て重ねて國家の新運命を續けしめることだけです。（同前）

張伯苓は「愛國」の語とともに、「新」をさかんに連發した。曰く、新中國、新國家、新少年、新精神、新運命、等々である。これは同じ頃、陳獨秀が『新青年』誌上で、新國家、新政治、新教育、新社會、新信仰等の語を用いたことを連想させる。しかし、兩者の用語の意味するところにはちがいが存した。たとえば陳獨秀は「憲法と孔教」（『新青年』第二巻第三號、一九一六年一一月）で次のようにいう。

われわれがもし、中國の法・孔子の道はわが國家を組織し、わが社會を支配し、今日の生存競爭の世界に適應させることができるものであると考えるのならば、共和憲法を廢すべきであるのみならず、およそ十餘年來の變法維新、流血革命、國會開設、法律改正（民國以前に行なわれた大清律は一條として孔子の道でないものはない）、および一切の新政治・新教育は、一つとして餘計なこと、誤ったことでないものはなく、悉く廢止してわれわれの財力の亂費を防がねばならない。

萬一この本分に安んぜず、西洋式の新國家を建設し、西洋式の新社會を組織して、現在の生存に適應しようという野心を抱くならば、根本問題として、まず西洋式の社會・國家の基礎、いわゆる平等・人權の新信仰を輸入しなければならない。この新社會・新國家・新信仰と相容れない孔教に對しては、徹底した覺醒、勇敢な決意を持たねばならない。[40]

陳獨秀の主張が孔教問題と民國の存亡とに關して發表され、しかも西洋の概念を直輸入的に持ちこんだのに對して、張伯苓は外國の侵畧と民國の存續との二つの問題に關して發言し、歐米の諺や事例を援用しながらも、「愛國」を基本とする絶ゆまぬ進取、自強を求めたのであった。さらに張はいう。

今日中國の第一の重要な政策は、教育にあっては才能のある領袖を培養して強い公正無私の政府を養成することでありま す。そうすれば外〔國の侵畧〕を禦ぐことができます。そうではなくて以前と同じように怠惰であると、人が我を亡ぼすのではなくて我自ら亡ぶことになります。（第四八期）

強力な指導者の出現を期待するとは、張の危機意識の高まりを暗示するものである。

このような張伯苓の激勵に呼應する論文が『校風』誌上にあらわれた。周恩來[41]（紀事類總主任）は「中國現時の危機」と題する論文（第四五期）で、中國の危機的状況を事實の問題と精神の問題とに分けて論じた。まず事實の問題として内患について、

今日、國會に聲なく、輿論は寂然とし、府・院の未だ一議を建つるを聞かず、各省の未だ一言を發するを聞かず。豈に今日の中國、已に眞に安んぜりや。

といい、外患については、

日俄協約、中日合同（二十一ヵ條條約）、鄭家屯の交鬨の種々の惊心動魄の事、均しく吾が國家をして困難の境に入らしむ。

といい、また精神問題については、「吾が國國民の道德、既に淪喪の極に達せりと謂うべし」といい、次のように呼びかけて結んだ。

願わくば吾が最も敬愛すべき同學よ、聞きて鷄鳴起舞の感、天下の興亡は匹夫も責有るの念を興こせ。弱冠（靑年）の請纓（從軍を志願する）の擧有らんことを欲せざれば、國事に大いに補することなし。幸甚なるかな、幸甚なるかな、吾れ玆に校長の言を以て吾が篇を終らんことを請う。「何事かなすべき時に何事かをなせ」。

明けて一九一七年の一月三一日、反袁運動で大きな役割を演じた梁啓超が、南開學校を訪ずれ講演した。(42) その中で梁は、袁世凱の死後もなおつづく時勢の危機的狀況と中國社會によどむ惡習を擧げて、學生に意志の練磨と學問の修得を求めた。その翌日二月一日に發行された『校風』第五二期に、新しく總編輯となった李綸襄が論說「學生の能力と社會の潮流」を書いている。李は、學生は社會に出ていく前は「光風霽日、萬里雲なし」といった狀態にあるのに、社會に出たのちはたちまち「煙霧朦朧、陰霾四合」の狀態におかれてしまう。すなわち、今日の中國社會の潮流は一つの惡い潮流である。われら學生の能力を消滅させてしまっているといい、社會の惡弊として私・詐・諂・驕・怯・懈の六點を擧げてこういう。

國家の強・不強は社會に根ざせり。社會の善・不善は學生に根ざせり。以て學生の能力か、社會の潮流か、孰れが勝ち孰れが敗れるか、乃ち國家の強弱・存亡の一大關鍵なるを知るべし。……請う、其の全力を用いて以て社會の惡しき潮流と戰わんことを。

この主張は前日の梁啓超の講演の趣旨と似たものであった。それまで國家―學生という形で論じられていた責任論が、國家―社會―學生という形で、「社會」の概念を挿入させたのである。社會改良のためには學生はさらに刻苦勉勵すべきである、(43) として、「學生に忠告す」（副編輯趙世純―第五三、五四期）は、奢靡を戒しめ、隋性を除き、盲從を愼しみ、早婚せぬことを求めた。『孟子』の一節を題名とした丁履進の「人の德慧術知有る者は、恆に疢疾（災患にある人）に存わる(やしな)の說」（第六〇期）も同樣の考えにもとづくものであろう。

そんな新しい模索をはじめた學生たちの前に、北京大學にあつまったいわゆる新文化運動の旗手たちがやってきた。なお、學生に強い影響を與えていた張伯苓は、一九一七年八月、アメリカ合衆國コロンビア大學大學院での敎育研究と敎育施設視察

のために南開學校を離れ（一九一八年一二月歸國）、かわってその前年に七年間（一九一〇―一九一六）のアメリカ留學を終えて歸國し、專門部主任として張伯苓を助けていた實弟の張彭春(44)が校長代理となった。

㈣　新文化運動の旗手たちの激勵―社會改良

一九一七年に入って南開學校の學生數は一千人を越え、名實ともに華北はおろか、中國を代表しうる中學校の一つとなった。その南開學校を中國内外から多くの名士が訪ずれ、そして學生を前に講演をおこなっていった。『校風』より中國人の重要人物を拾いあげると、次表のとおりである。

月・日	氏名（※印は北京大關係者）	講演題目〔〕は内容說明	掲載誌名
1・31	梁啓超	〔意志と學問の鍛錬は學生の最重要事〕	校風56・57
5・23	※蔡元培	〔三育について〕、〔思想の自由〕	校風67、敬業6
〃	吳玉章	（講演せず）	―
〃	※李石曾	〔留佛勤工倹學運動について〕	―
6・26	徐世昌	（?）	―
〃	※陳獨秀	近代西洋教育	新青年3―5
〃	章士釗	新國家と新政治	校風85
11月末	※陶孟和	新國家と新社會	校風81
12月(?)	※胡適	新國家と新文學	校風82

校董である徐世昌を除くと、他は反袁運動に關係した人物か、北京大學關係者である。ともに當時の南開學校の教員・學生の意識を反映した結果の人選であったとおもわれるが、北京大學關係者が多いことが目につく。南開學校側の意向とはいえ、北京大學側からすれば、大學改革を實あるものにするには教授陣とともに「すぐれた學生」をあつめる必要がある。南開學校はその意味でも優秀な學生の學ぶところであると考えて、蔡元培以下の教授たちが宣傳をかねて出向いたためとも考えられよう。

梁啓超については前述した。五月の蔡元培ら三人は自治勵學會・敬業樂群會・演說會という三つの學生團體の招請に應える形で、來校した。蔡元培は晝と夜の二回の講演をおこなった。晝間、全校學生の歡迎會での講演は智育・德育・體育の三育を重視する南開學校（すなわち張伯苓）の教育方針を稱讚したものであった。夜は前記三會の合同演說會に臨み、「思想の自由」について次のように發言した。

行動は必ずやすじみちをたてておこなうべきであります。これからはずれるとその正鵠を失します。……まして道理のある信念であるなら、必ずしも他人と同じくすることはありません。自分が正しいとおもうことは、即ちそれを正しいとしていいのです。といって、決してうそをついて人をだましてはなりません。これが思想の自由です。凡そ物の評斷力（論斷する能力）はその思想によって定まります。所謂絕對的なものはありません。自分の學說で他人を束縛することはできませんし、他人の學說で自分を束縛することもできません。

この蔡元培の講演について、周恩來は「名言にして正論、諄々として人を傾聽させる」ものであったといい、さらに「記者（周恩來）は六年前に先生（蔡元培）の著作を讀み、今日はじめて御姿を拜見しました。私はよろこびの餘り、淺薄をかえりみず、〔先生の講演を〕筆記しました」と記している。[45] 同行の李石曾は留佛儉學會について演說したが、吳玉章は時間の都合で演說はなかった。蔡・李・吳の三人はこれより前、パリで勤工儉學會（一九一五年）、ついで勤工儉學生の支援活動を目的とする中佛教育會（一九一六年）を組織した時の同志であった。

第一〇回卒業式に來賓として出席した陳獨秀は、周恩來ら卒業生を前に、近代西洋教育の優秀さを強調し、そのとるべき教育方針として次の三ヵ條（五項目）を擧げた。

一、自動的であれ、被動的であることなかれ。啓發的であれ、灌輸的であることなかれ。
二、世俗的であれ、神聖的であることなかれ。直觀的であれ、幻想的であることなかれ。
三、全身的であれ、腦部のみであることなかれ。

一九一五年九月に『青年雜誌』創刊の宣言書ともいうべき論文「敬んで青年に告ぐ」の中で、青年に「自主的であれ、奴隷的であるなかれ」「進歩的であれ、保守的であるなかれ」「進取的であれ、隱遁的であるなかれ」「世界的であれ、鎖國的であるなかれ」「實利的であれ、虚飾的であるなかれ」「科學的であれ、空想的であるなかれ」と、呼びかけた陳獨秀は當然のことながら、そのような青年を育てるべく、教育に大きな關心をもっていた。『青年雜誌』第一卷第二號には「今日の教育方針」を書いて、現實主義、惟民主義（民主主義）、職業主義（職業尊重）、獸性主義（野性保持）の四項目を提起している。この年北京大學に迎えられた陳は南開學校學生を前に第二の、より具體的な教育方針を掲げたのである。

反袁運動に參加した章士釗は、この年の一月より北京で、李大釗・高一涵の助けを得て『甲寅日刊』を發行していた。六月當時はまだ北京大學に奉職していなかったが（一一月に圖書館主任兼教授に就任）、陳獨秀とは日本留學（一九〇二年）以來の友人であり、『新青年』第三卷第二號（一九一七年四月一日）に「經濟學の總原則」という論文を一篇だけ書いている。章の南開學校での講演「新國家と新政治」は見ることができないが、章は袁世凱死後の政局について、徒らに約法國會の回復を唱えこれを口實に争うことはやめるべきである、今や新たな政治體制を構築すべきであり、少なくとも從來の國會形式を回復すべきではない、というような主張をしていたといわれる。(46)

陶孟和（一八八七—一九六〇）、名は履恭、孟和は字である。一八九八年嚴館開設時の五人の塾生の一人で、一九〇八年「私立第一中學堂」（南開學校の前身）の高級師範班を卒業して日本（東京高等師範學校）、ついでイギリス（ロンドン大學）に留學。歸國後北京高等師範學校教授を經て、一九一四年より北京大學法科教授の職にあった。(47)陶は『新青年』の執筆者の一人でもある。同誌第三卷第二號に發表した「社會」(48)と題する論文の中で次のように書いている。

社會とは人類の種々の活動の規範〔周圍〕であり、人類の集團生活の全體である。

社會制度は誠に大衆〔人群〕を革新し社會を革新する基礎である。社會の進化は社會制度の進化なのである。……（諸制度の改革は）個人の責任にかかっている。

陶の講演「新國家と新社會」も見ることができないが、右の「社會」と同趣旨のものであったとおもわれる。

胡適は、張伯苓渡米後を受けて校長代理となった張彭春とはアメリカ留學の同期生、コロンビア大學での仲間である。その關係から來校・講演になったものとおもわれる。胡の「新國家と新文學」は見ることができる。その中で、彼は、もし新しい知識を求めようとすれば新しい文學が必要です。それは文學が實に思想を表現するものであるからです。しかし中國の文學は言文不一致で、中國文學を學ぶことは外國語を習うのと異なりません。これはよくないことです。文學と國民は相互に密接な關係であるべきです。それ故に一つの新國家を造ろうとすれば、一つの新文化を造ることが必要です。そのためにはまず四つのことが大事であります、とのべて、

一、話すことがなければなりません。

二、何でも話しなさい。どんな風にでも話しなさい。

三、自分の考えることを話しなさい。他人のいうことをいってはいけません。

四、現在のことを話しなさい（過去のことをいってはいけません）。

という、自我の解放をめざすような四項目を掲げた。さらに具體的行動として、學生に試驗の答案に自分の考えを白話體で書くことを試みるように提案し、白話文學への學生のとりくみを訴えたのである。

總じて、新文化運動の旗手たちは、新國家の建設のためには新しい制度・概念の導入が必要であるというのである。それは張伯苓の〝新しい〟創造に共通するとともに、國家論から個人、社會へと問題の力點を移し、社會改良を自覺しはじめた學生たちの意識に合致するものでもあった。

「惡劣なる社會を改良し新國家を創造する責任はわれわれ學生にある。そのための決斷力をいまから備えなければなりません！」（袁祥和「決斷力」―第九一期）

㈤ 再び學生の責任論――「合群」

しかし、現實の中國內外の情勢は、社會改良をめざす學生にとって決して樂觀視できるものではなかった。一九一七年七月の張勳による清朝の復活をねらった復辟クーデター、これを驅逐したのは袁世凱の乾分であった段祺瑞。その段が翌一八年五月には日本との間に日中軍事共同防敵協定を結んだ。同協定は、一九一五年のいわゆる對華二十一ヵ條要求につづく、中國の日本への隷屬化を推進させる內容であった。中國國民各層は反對運動にたちあがった。天津では六月八日に學生集會が開かれ氣勢をあげたが、運動自體は警察當局の取締り規制もあって盛り上がりを缺くものとなった。

『校風』誌ははじめて「國貨」と大書した廣告（天津造胰（せっけん）公司のもの）を掲載して運動支持を表明したが、その論調は單純な反日という形をとらず、また問題を外にのみむけるのではなくて、學生、國民と國家との關係においた。第一〇〇期（一九一八年七月）の社論は二篇であった。その一つ、杜國英「今後の學生愛國の眞相」は冒頭で次のように書いている。(49)

嗚呼、我が國の今日は何の日ぞ。外侮は頻りに來、內憂は疊々起く。危險の日にあらずや。……大聲疾呼するも則ち耳を充てて聞くなし。身を奮いたたせて顧みざるも則ち應ずる者蓋し寡なし。而して不識不知なる者も亦た酣嬉宴樂して、宛（あたか）も事無きが如し。其の有識なる者も亦た聲勢に憚り、祿位に誘われて敢て作爲する所有らざるなり。……夫れ、百人を率いて聚むれども一人の愛國を知る者なく、十人を率いて國を愛せしむるも一人の其の效を收むる者なければ、其の名有るも其の實なく、思想有りても方法なきなり。……名もなく思想もなき者、中國に盈てり。此れ國力の日に衰うる所以にして、外侮の日に甚しかる所以なり。嘆くべきかな。

この「嘆くべき」狀況を打破し、亡國の民となるのを防がねばならない。そのための愛國の核となれるのは學生であるとして、杜國英は次の四點に留意せよという。すなわち「浮動するな（うわついた行動をとるな）」、「堅固な意志をもて」、「餒（う）えるな」、そして最も大切なこととして「犧牲を能くせよ」、の四つである。「犧牲とは己の力を盡くして國の爲めにすることで

ある」とし、安史の亂で唐朝に忠誠を誓い安祿山にしたがわなかったために殺された顔杲卿（顔眞卿の從兄）と、一九〇九年ハルビン驛頭で前韓國統監伊藤博文を射殺した朝鮮民族の英雄安重根の名をあげている。

もう一つの社論、張若農の「今日の青年と國家」では、まず、

> 嗟、夫れ今日、中國國勢の危急なること亦た甚しからずや。歐戰方に急にして遠畧に遑あらず。日本は狡にして逞しうを思うて起ち、我を侵し我を陵ぎ、其の強力を恃みて公理を蔑視す。

とのべて、日本の侵畧を非難する一方、國内については次のようにいう。

> 我が國の人、甘心して忍受す。甚しきに至りては、國家の主權を將て喪失するをも惜まず。少數の愛國の士の奔走呼號し切齒怒目する有ると雖ども、卒に如何ともするなし。殊に外患の來たるは實に内訌に由るを知らざるなり。試みに觀るに、我が國革命より以後、柄政の者の多くは意見の合わざるを以て、室を同じうして操戈し、兄弟牆に鬩ぎて、外に其の侮りを禦がず、徒に一己の私利、一時の榮譽を爭うを知るのみ。而して國事を顧みざるに置き、人民は炭に塗れ、元氣は大いに傷つけり。

私利私欲に走り、計畧をめぐらし抗爭をつづけ、「民國」「國民」を顧みない政治家・軍人を痛烈に非難する。(50) では、かわって「民國」を擔うのは誰か。——青年である。

> 共和政體の政府の立つ所以は、全く完全なる人才の國民に恃めり。而して國民の能く完全なる人才を成す所以の者は則ち又た青年に恃むなり。蓋し青年は國家の命脈爲り。……青年に恃むにあらざれば以て國を立つるに足らず。青年、國を愛するにあらざれば則ち以て存するを圖ること難し。

そして、今日青年のなすべきこととして、「敦品」、「勵學」、「合群」、「自立」の四點を擧げている。そのうち「合群」は「全體國民」が「同心協力する」ことである。張伯苓は同じ頃「今日の中國の最も必要なことは聯合である」、「愛國心は國民を聯合させる公共の繩索である」(51) と發言しているが、ここにいう「合群」そして「聯合」は、内に對しても外に對しても共

和國＝中華民國を守るためのものであった。

一九一五年の陳鋼たちと同様に、一九一八年の南開學校學生も——袁世凱專制によるものであったとはいえ「統一」が崩れ、抗争と混亂の時代に突入していた分だけ深刻かつ悲觀的に——、中國をとりまく內外情勢に對してつよい危機意識を抱いていた。そして彼らは「國家の命脈」としての責任を感じたが故に、「合群」を唱えたのであった。

一九一八年一一月一三日、天津では各界が結集して第一次世界大戰勝利の祝賀デモ行進がおこなわれた。しかし、それを報じた張若農は、「我が國は協約國の一員ではあるが、ドイツ・オーストリアと國交を斷絶して以降、戰場に一人の兵士も送りこまず、一矢も發しておらず、まったく虎の威を假りる孤、厚顏無恥といえる。加えて國內の爭いは激烈をきわめている。私は將來の禍が恐しい。想像だにできない。そう考えると、今日のデモ行進は喜ぶべくもあり、また悲しむべきでもある」と記している（第一〇八期、雜俎「慶祝歐戰協約獲勝游行會記」）。

內に對しては政治抗爭と「民國」維持への懸念、外に對しては連合國の一員として國際的な責務をはたしえない弱みとそれ故におこる、アメリカ大統領ウィルソン提唱の戰後處理のための「一四カ條原則」にもとづくであろうパリ講和會議への期待。この交錯した意識の中で、パリ講和會議で中國の返還要求を無視して、山東省におけるドイツの權益を日本に讓渡することが決定されたというニュースが傳えられ、そしてそれに抗議した北京學生の「曹汝霖邸燒打ち」と北京政府による「北大生ら三二名逮捕」の報せがその後を追ってきた。期待は失望、そして怒りへとかわった。南開學校學生をはじめ、天津の學生は、校內組織をつくり、學生連合會を成立させ、そして學校から出て各界に働きかけ、各界連合會へ諸勢力を結集させたのである。(52)

五四事件發生以降、五月末の停刊までの閒、『校風』は第一二四期から第一二七期までの四冊が發行された。そのうち第一二五、一二七期をみることができないが、第一二四期の言論「自由の南開を論ずる」（鄒良驥）は次の一節ではじまる。

報［紙］の功用は大きい。小は社會の改良、大は國家の改造である。その福を食む（はむ）のが必ずや民治の國であるのは、その言論が自由だからである。

報紙の功用――社會改良と國家改造（新國家の建設）のために、學生はまず『校風』を發行し、仲間の意識改造をめざした。言論の自由――それは南開學校の精神であり、『校風』の基本でもあった。しかし、いまや南開學校學生が内に救國團をつくり、外に天津學生連合會を組織して、運動に積極的に參加しはじめると、『校風』はその自由さと週刊誌という性格のために、新しい事態に對應できるものではなくなった。かくして『校風』はのちにも健筆をふるう章志の「犧牲主義」を卷頭論文とする第一二七期（一九一九年五月二六日）をもって停刊し(53)、同日かわって「同胞の愛國心を鼓吹し同胞の敵氣心を喚起する」ことをねらって日刊誌『南開日刊(54)』が創刊され、運動に奔走する學生を支持することとなったのである。

おわりに

『校風』は、當時の南開學校學生の樣々な思想・意識を集約したものである。本論はそれらの主張のうち、主に言論欄掲載論文をその時期の政治社會問題に關連づけて拾捨して、學生の意識構造の解明を試みた。その限りでは五四前夜の學生の意識は、一貫していたといえる。それは「天下の興亡は匹夫も責有り」という語に代表される、國家・社會への學生の責任感であった。以下要約して結びとする。

一九一五年、目前の國家の危機的狀況を前にして、知識分子の一員である學生はそれを坐視することができなかった。中華民國が成立し、共和政體の社會になったいま、學生たちは復古的ではあるが、傳統思想＝國學の中に外國に對抗する思想を求めた（救國）。それは當時の學生にとっては、國學が日本を含めた外國のヨーロッパ的なものに對立する、もっとも非ヨーロッパ的なものであったからである。しかし、國學は帝制運動を推進する袁世凱の利用するものでもあった。帝制批判を通して、「古」なるものから自立をはかるため、張伯苓は〝新しい〟創造を提唱した。それは學生の眼を外から内にむけさせるものであり、「現時中國の危機」（周恩來）の原因である軍閥政治への批判となった。新文化運動の旗手たちの激勵も作用して、學

生は社會改良による新中國建設を模索した。しかし現實の中國内外の情勢はきわめて複雑で、その解決は困難なものであった。新劇團が一九一八年一〇月一〇日の國慶節當日に發表した新作『新村正』は、一九一七年の中國農村を農民、地主、買辦、そして外國勢力の對立する中で、豪紳が勝利をおさめ、農民の味方が敗北するという結末をもって、まさにあるがままに表現した。(55)

學生たちはいまいちど、個人—學校—國家（第一〇一期、王捷俠）、自己と國家との關係（第一〇〇期、杜國英、張若農、邵緒現）を考え、人道主義の政府の建設（第一一三期、張若農）をめざした。そして、パリ講和會議で「公理」が敗れ、「強權」が勝ち、國權がふみにじられた時、學生は活發な奮闘精神で犠牲をも恐れずに運動に身を投じた。國權を取りもどすのだ、それは中華民國を守ることなのである。五色旗を掲げ國歌を吹奏し、中華民國萬歳を三唱すること、これらに反對し、妨害を加えるものはすなわち民國の敵なのである。學生たちは「合群」して外にあたり、内に抗議した。この時點で、『校風』に育てられた學生は、その表現方法と行動範圍の兩面において、『校風』・南開學校の枠を越えて前進していった。はげしく展開する運動に對處するため、目標に向って邁進する學生の要求に應えるため、『校風』はその任務を『南開日刊』に託したのである。

注

（1）片岡一忠『天津五四運動小史』（京都・同朋舍、一九八二年、京都大學人文科學研究所共同研究報告『五四運動の研究』第一函第二分冊）。

（2）本稿執筆にあたっては次の諸研究を參考にした。記して謝意を表す。

今村與志雄「五四前夜の思想狀況の一側面——李大釗に即して——」（東京都立大學『人文學報』第二五號〔一九六一年三月〕）。丸山松幸『五四運動——その思想史』（紀伊國屋書店、一九六九年）。野村浩一「中國・一九一〇年代の思想世界——『新青年』を中心に——」㈠、㈡、㈢、㈣、㈤（『立教法學』第二三、二四、二五、二九、三〇號—未完）。李澤厚『中國現代思想史論』（北京・東方出版社、一九八七年）—特に「啓蒙與救亡的雙重變奏」。島田虔次『新儒家哲學について——熊十力の哲學』（京都・同朋舍、一九八七年、京都大學人文科學研究所共同研究報告『五四運動の研究』第四函第十二分冊）。Schwarcz, Vera. *The Chinese Enlightenment: Intellectuals and the Legacy of the May Fourth Movement of 1919* (Berkely and Los Angeles, University of California Press, 1986).

また、天津の歷史については、來新夏主編『天津近代史』（天津・南開大學出版社、一九八七年）を參考にした。

（3）南開學校については、主に『國府紀聞　國立南開大學』（臺北・南京出版、一九八一年）に據った。

（4）嚴修については、『天津文史資料選輯』第二五輯（一九八三年九月）所收の齊植璐「天津近代著名教育家嚴修」に據った。

（5）張伯苓については、王文田等『張伯苓與南開』（臺北・傳記文學出版社、一九六六年）、孫彦民編著『張伯苓先生傳』（臺北・臺灣中華書局、一九七一年）、南開大學校長辦公室編『張伯苓紀念文集』（天津・南開大學出版社、一九八六年）、および前掲『國府紀聞　國立南開大學』等に據った。なお『敬業』、『校風』等南開學校關係誌に揭載された張伯苓の演說記錄は、王文俊等編『張伯苓教育言論選集』（天津・南開大學出版社、一九八四年）に收錄されている。

（6）劉行宜「盧木齋盧愼之兄弟」（『天津文史資料選輯』第一七輯〔一九八一年一〇月〕）參照。

（7）『校風』第二期、紀事。

（8）以上、張伯苓「四十年南開學校之回顧」（前掲『張伯苓教育言論選集』、二四三―二四七頁）。

（9）前掲『張伯苓教育言論選集』所收。

（10）黃鈺生「早期的南開中學――一九一二至一九一六年間一些片斷的回憶―」（『天津文史資料選輯』第八輯〔一九八〇年四月〕所收。のち前掲『張伯苓紀念文集』に再錄）。

（11）一九一七年正月の新入生は一一五人であった。その出身省別內譯は次のとおりである（『校風』第五三期、校聞）。

出身地（省）名	人数
直隷（天津縣）	45
直隷（天津縣以外）	15
黒龍江	4
吉林	3
奉天	3
山東	2
河南	3
江蘇	7
浙江	9
安徽	3
江西	1
湖北	1
四川	2
貴州	2
廣東	13
福建	2
合計	115

また、一九二〇年の學生出身別內譯は次表のとおりである。
（『南開學校十六年概況』〔一九二〇年一〇月〕による）

出身地（省）名	人数
直隷（京兆）	63
直隷（京兆を除く）	410
黒龍江	13
吉林	31
奉天	46
熱河	4
山東	76
山西	20
河南	69
陝西	16
江蘇	44
浙江	61
安徽	79
江西	21
湖北	14
湖南	12
四川	15
雲南	6
貴州	13
廣東	71
福建	27
（朝鮮）	2
合計	1113

（12）懷恩『周總理的青少年時代』（成都・四川人民出版社、一九七九年）、五七頁。なお周恩來は南開學校に一九一三年八月―一九一七年六月の間在學した。

（13）前注（11）の二表からも學生の半數以上が天津以外の出身者であることより、校內外の宿舍に居住する學生が多かったであろうことは容易に想像できる。

（14）前注（12）に同じ。

（15）前掲『張伯苓教育言論選集』一七頁。『校風』第三六期原載。

（16）課外活動の諸團體については、『校風』各期の紀事、さらに『南開校風十六週年紀念號』、『南開學校十六年概況』（ともに一九二〇年九月刊）、『南開週刊』第四四期（一八週年紀念號）（一九二二年一〇月刊）に據った。なお『南開週刊』は『校風』の後身で、一九二一年四月創刊した。

（17）新劇團の活動については、夏家善・崔國良・李麗中編『南開話劇運動史料（一九〇九―一九二二）』（天津・南開大學出版社、一九八四年）に詳しい。

（18）前掲『南開話劇運動史料』の編者は、新劇團を敬業樂群會の一組織と記す（同書、二頁）。

（19）前注（16）の諸文獻に據った。また、丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第五集（北京・人民出版社、一九八七年）には、『校風』（南開校

風)、『敬業』(敬業學報)、『勵學』、『南開思潮』についての解説文がみえる。

(20) 前掲『辛亥革命時期期刊介紹』第五集參照。なお、『校風』には寄贈された雜誌がその都度列擧されている。

(21) 『校風』第三六期、校聞。

(22) 本論では、南開大學所藏本を寫眞複製した京都大學人文科學研究所本を利用するが、一二七期(增刊二期を含めて一二九期)のうち三五冊を缺く。そのために重要な論文、記事、演説録のかなりのものに論及できないであろうことをあらかじめおことわりしておく。なお、天津市歷史博物館資料室等編『校風・敬業總目錄』(一九七九年序)が出版されているので、人文研本に缺く號についてもその掲載論文名、執筆者名を知ることができる。

(23) 『校風』に關する研究としては、廖永武「周恩來同志與南開《校風》」(『南開大學學報〔哲學社會科學版〕』一九七九年第一期)があるにすぎない。

(24) 創刊時は編輯責任者を主筆と稱し、のち總編輯と改めた。

(25) 陳鋼(一八九二〜?)は一九一二—一九一六年の間、南開學校に在學。『星期報』、『校風』さらに『勵學』の編集にあたって指導的役割をはたした。また新劇團活動にも參加した。前掲『南開話劇運動史料』(六六—六八頁)に「我在南開新劇團」の一文がみえる。一九一六年六月卒業後日本に留學し、翌年留學してきた周恩來らと「留日南開同學會」を組織した(『校風』第八九期參照)。

(26) 『校風』第一〇六期(一九一八年一一月七日)「校聞」に下表のような、學生年齡調査結果が掲載されている。しかし、一九一五年當時は、陳鋼(二四歲)、童啓顏(二一歲)だけでなく上級生には二〇歲を過ぎた者が多かったと思われる。彼らは辛亥革命の「光明」とその後の「暗黑」を二つながら體驗したのに對して、下級生やその後の新入生は當初から暗黑の時代に生きた譯で、兩者の中國の內外情勢に對する感覺には多少の差異があったことは確かであろう。

年級	班次 一	二	三	四	五	六	七	八	九	各級平均
四	18.4	19.9	19.6							19.3
三	19.3	19.3	18.3	18.2						18.9
二	18.3	17.8	17.4	17.4	17.7	17.5	18.			17.9
一	17.7	16.4	17.5	15.8	16.9	17.	14.2	16.6	17.2	16.8
補習	18.2	17.2	16.5	15.5						16.1

(27) 張朋園「清末民初的知識份子(一八九八—一九二一)」(徐復觀等著『知識份子與中國』〔臺北・時報出版公司、一九八〇年所收、『思與言』第七卷第三期原載〕、李澤厚前掲「啓蒙與救亡的雙重變奏」參照。

(28) 陳鋼は翌一九一六年二月發行の自治勵學會機關誌『勵學』第一期にもほぼ同じ趣旨の「發刊詞」を書いている。

(29) 同じ一九一五年の五・七の「國恥」によって危機意識をよびおこされた李大釗も、救國と國民の關係について同樣の見解を發表している。李大釗「全國父老に警告するの書」、「國民の薪膽」(ともに『李大釗選集』收錄)參照。前注(2)今村論文に據る。

(30) 『校風』第八九期所收の「留日南開同學會職員」の名簿に據る。童啓顏も卒業後日本に留學し、早稻田大學政治科に學んだ。

(31) 『校風』第五、七期の紀事。なお孔子誕生日は一九一六年以降も休校となった。

(32) 『論語』衞靈公第十三。

(33) 『禮記』祭義の曾子の言。

(34) 前注(10)黄鈺生回憶錄參照。

(35) 一八五八年、アメリカ合衆國議會上院議員選擧（イリノイ州）に共和黨から立候補したリンカーンのクリンストンにおける演説の一節。高木八尺等譯『リンカーン演説集』（岩波書店、一九五七年）、六〇頁。

(36) 『校風』第三六期。

(37) 張伯苓の「愛國」への言及はさきに一月一九日の修身班での講話にみられる。彼は「學校は何を教えるところか」といい、「第一に愛國」であるとのべている（『校風』第一八期。前掲『張伯苓教育言論選集』〔三―五頁〕）。

(38) 「眞の國民」の語は『校風』第七期（一九一五年一〇月一一日）の警鐘欄にみえる。童啓顔の「眞國民」である。ここで童は「世界第一等の人爲らんと欲せば先ず世界第一等の苦を受くべし。世界第一等の事を作さんと欲せば先ず世界第一等の魔に勝つべし」と記す。

(39) 『校風』第三七期。

(40) 前注(2)丸山松幸著書、一〇九―一一〇頁參照。

(41) 周恩來と『校風』の關係については、前注(23)の廖永武の專論がある。同論文に引く『校風』掲載の職員表に據ると、周恩來は創刊時よりその運營にかかわっていた。初め「課藝選錄」と「各會佈告」欄の編輯を擔當していたが、一九一六年一月に文藝部主任、同年三月には紀事部主任となり、同年九月の大改組で紀事類總主任と經理部總經理の重職を兼務し、一九一七年二月卒業を前に役職を降りた。しかし卒業（六月）まで編輯員としてとどまった。

(42) 講演記錄は『校風』第五六、五七期收錄（周恩來筆錄）。また同第五三期校聞參照。梁啓超と嚴修は變法運動以來の知己の間柄であった。なお天津『大公報』（一九一九年一月五日、一二日）に梁啓超「意志之磨錬」と題する演説錄が掲載されている。

(43) これより前、一九一六年一一月、專門部主任の張彭春（後注(44)參照）は、社會改良への學生の積極的とりくみをうながすとともに、そのための知識の習得の必要性をのべている（『校風』第四五期演説）。

(44) 張彭春（一八九二―一九五七）、字は仲述。張伯苓の實弟。南開學校の前身である私立第一中學堂の第一期生（一九〇八年卒業）。保定高等學堂を卒業し、一九一〇年、外務部・學部共同の「第二次庚款留米學生試驗」に合格。この時の合格者に趙元佐、竺可楨、胡適がいた。渡米後、クラーク大のちコロンビア大に學び、教育・哲學それに演劇を修めて一九一六年歸國。直ちに南開學校專門部主任に就き、兄をたすけるとともに、新劇團副團長となって、演劇活動を指導した。以後南開學校の新劇が寫實主義的になったといわれる所以は彼の指導によるものであろう。劉紹唐主編『民國人物小傳』第三冊（臺北・傳記文學出版社、一九八〇年、一八〇―一八一頁）、馬明「張彭春與中國現代話劇」（前掲『南開話劇運動史料』所收）參照。

(45) 蔡元培の晝間の演説は『校風』第六七期、夜の演説と當日の狀況については『敬業』第六期。ともに周恩來の筆錄である。高平叔編『蔡元培全集』第三卷（北京・中華書局、一九八四年）、四五―五一頁。

(46) 高田淳『章炳麟・章士釗・魯迅――辛亥革命の死と生と』（東京・龍溪書舍、一九七四年）、三〇九頁。また、丸山松幸「民國初年の調和論」（『中國近代の革命思想』東京・研文出版、一九八二年所收）。

(47) 橋川時雄編『中國文化界人物總鑑』（北京・中華法令編印館、一九四〇年）、四九二頁。なお、文集『孟和文存』（上海亞東圖書館　一九二五年）の卷頭には嚴範孫（修）、林墨靑（兆翰）、張伯苓の三人への獻辭が掲げられている。林墨靑は天津教育界の重鎭であった人物。劉炎臣「一生熱心興學的林墨靑」（『天津文史資料選輯』第二五輯）參照。

(48) この論文については、前注(2)野村論文㈠一一七頁以下參照。なお、『新青年』原載文と『孟和文存』再錄文との間には若干の異同がみられる。いまは『新青年』に據った。

(49) 第八二期（一九一八年四月上旬）から第一〇一期（同年一〇月四日）まで掲載。

(50) 同樣の論は散見できる。たとえば第一一二期の「趨時と識時」（張若農）は次のように書いている。――試みに觀るに、我が國數年以來內

亂紛擾して匪寇繁多し。強鄰逼處して外患環生す。當道なる者は皆な時の流れを趨い、自警自勵するを知らず。徒らに陳編を墨守し、舊説を堅持するを知るのみ。閲歷いまだ深からず、識見いまだ卓れず。その行う所、爲す所を擁すに以て時を趨うに足るのみ。

(51) 渡米中の張伯苓が一九一八年六月、コロンビア大學でおこなった演説で、『南開思潮』第二期に掲載された。前掲『張伯苓教育言論選集』(五六—五八頁) 收錄。張は歸國後の講演 (一九一九年一月) でも、組織化、社會自覺心の伸長を説いている (前掲書、五九頁以下參照)。

(52) 天津における五四運動とそこでの學生の行動については、前注(1)片岡論文をみよ。

(53) 『校風』は一九一九年一一月七日、號數は前に引き續き第一二八期として復刊した。從來通り週刊の形をとったが、一九二〇年に入り、第一三七期 (一月三〇日) 發行後七ヵ月のブランクがあって、ようやく九月一一日に第一三八期を出した。以後週刊にもどったが、現在われわれが存在を知る最晩の號は一九二〇年一二月二四日發行の第一五一期である。その後、一九二一年四月『校風』にかわって『南開週刊』が創刊されたことが知られる。前掲『校風・敬業總目錄』、『南開週刊』第四四期、に據る。

(54) 『南開日刊』は五月二六日創刊、間に二度の休刊 (六月五日—同一〇日、同月二三—二四日) をはさんで、八月一二日第六〇期と「滿六十期停刊紀念號」を出して停刊した。大きさははじめ新聞紙大一枚、のちB四判一枚となった。內容は論説、演説、校外紀事、校聞、調査、雜俎、文苑、小説、函電、報告等に分かれる。そのうち校外紀事、調査、函電は『校風』とは異なり、外部との關係のつよい性格を表わすものといえる。また、『校風』が學生を先導するような雜誌であったのに對して、『南開日刊』は「愛國諸青年の後に追隨」する (夢痕「發刊詞」)、すなわち運動にかかわる出來事、ニュースを傳達することを任務とした。該日刊については、中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編譯局研究室編『五四時期期刊介紹』第二集 (北京、生活・讀書・新知三聯書店、一九七九年) 參照。

(55) 『新村正』の臺本、評價等については、前掲『南開話劇運動史料』をみよ。

この論文は、「民國初期の文化と社會」共同研究班 (狹間直樹班長) の報告である。